

木曽三川 歴史・文化の調査研究資料

tlssd

2012

冬

Vol.81

平成24年

地域の歴史

東濃地方の中心都市として
発達してきた瑞浪市

地域の治水・利水施設

東濃地方の発展を支えた東濃用水道事業

歴史記録

高須輪中の排水管理 第一編

高須輪中の埵樋の設置 ― 明治以前まで ―

研究資料

石田 泰弘

一八五四年地震について





東濃地方の中心都市として 発達してきた瑞浪市

濃尾平野の東端、木曽谷の入口にあたる東濃地方の中心都市である瑞浪市は、時代とともに東山道・鎌倉街道・中山道が整備されてきた交通の要地でした。美濃焼の産地として知られ、現在も窯業が盛んな地域です。

東国と畿内の文化の接点

瑞浪市は、岐阜県の南東部、木曽谷の入口にあたり平野部と山岳地帯の交差する地域です。南は愛知県豊田市に隣接し、北は木曽川が深い溪谷となつて西に流れ、対岸は恵那市・八百津町になつています。市の中央を東から西に流れる土岐川が形成した瑞浪盆地に人口が集まり、東濃地方の中心地となつていきます。

かつては中山道が通る交通の要路でしたが、現在はJR中央本線・中央自動車道・国道一九号が東西に貫通しており、名古屋方面へのアクセスが向上しています。

周辺の多治見市・土岐市とともに美濃焼の産地として知られています。

市内には縄文時代の遺跡が、八瀬沢遺跡(大湫町)・大島遺跡(釜戸町)・天徳遺跡(土岐町)など



戸狩荒神塚古墳

東山道から鎌倉街道へ

律令制下の当市域は、大部分が土岐郡に属していました。律令制で強力に進められた施策に官道の整備がありました。大化の改新の八年後に駅伝の制を定め「処々ノ大道ヲ修治ス」(日本書紀)に始まり、大宝二年(七〇二)には「始メテ美濃ノ国岐蘇山ノ道ヲ開ク」とあります。こうして都と東国を結ぶ官道として開かれた東山道には、美濃国内に不破・大野・方県・各務・可児・土岐・大井・坂本の八駅が置かれ、このうち土岐駅が瑞浪市域にありました。

駅の運営は、駅馬の準備や貢物の運搬を担った駅子(田を給され役務に従事する者)に大きな負担となり、嘉祥三年(八五〇)付で「土岐・坂本の二駅は道程が長いので、荷物を運ぶ駅子の辛さは他駅の数倍で、駅子が逃げて駅伝に支障をきたしている」との記録が残っています。朝廷はこ

うした事態に貞観四年(八六二)・同五年・同一三年に「土岐・恵那郡の百姓の疲弊を助けるために一年間の租税を免ずる」など駅伝制度の維持に努めています。

その後、平安時代末期になり貴族による政治が衰えるとともに駅伝の制も廃れましたが、鎌倉幕府が開かれると、東山道を改修、コースを一部変更して、都と鎌倉を結ぶ鎌倉街道が整備され新しく宿駅制度が設けられました。当市域では土岐駅を通るコースが廃され、新たに日吉と釜戸に宿駅が置かれるコースに変更さ



れました。

守護大名土岐氏の盛衰

源頼朝が鎌倉幕府を開いた際、当地方の有力者であった源光衡は美濃守護に任じられ、姓を土岐氏と称し一日市場(土岐町)に居館、神籠(土岐町)に鶴ヶ城を構え、周囲の要地に一族を配し、さらに市原光善寺を建立して菩提寺とし美濃国統治の拠点としました。

光衡の子光興は、承久の乱(一二三二)で朝廷方として参戦し、木曾川九瀬の板橋の渡し・池瀬の渡しで幕府軍に敗れ、浅野(土岐市)に隠棲しますが、その子光定が直ちに失地を回復し、その後は北条家と姻戚関係を結び美濃における権勢を確立していきます。

やがて鎌倉幕府の倒幕に貢献した土岐頼貞は、足利幕府開府により初代美濃国守護となり、南北朝期には武家方として活躍、幕中諸家の筆頭として重んぜられ、「土岐絶えなば足利絶ゆべし」と言われる権勢を得て以降一三代に渡る美濃国守護土岐氏の基礎を築きました。平安時代末期より当地を拠点としてきた土岐氏ですが、頼貞の子頼遠の代で守護所を長森(岐阜市)に移しました。

守護大名として美濃を支配してきた土岐氏は、戦国時代に家臣斉藤道

三に追い落とされ、その後の美濃の支配者は、斉藤・織田・豊臣と目まぐるしく変わりました。

分割統治と中山道

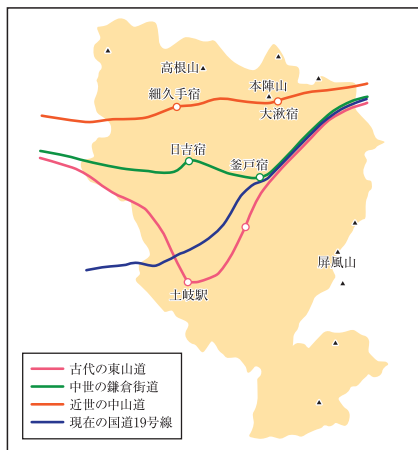
関ヶ原の戦いにおいて、東濃は西軍方の武将が多かったたので、中山道を西下する徳川軍との間で東濃合戦と呼ばれる一連の戦いが繰り広げられました。東濃での戦いは持久戦となりましたが、関ヶ原で西軍が敗れたことで合戦は終結しました。

戦いに勝利した徳川家康は、西軍方から没収した約四四〇万石の領地を配下の諸氏に分与する賞罰を行いました。西軍方が多かった美濃国については細分して譜代大名を配置したほか、幕府直轄地を多く設定し美濃代官に納めさせることにしました。この時点での瑞浪市域は三ヶ村・九千七八二石余で、小里氏・岩村松平氏・明知遠山氏・木曾衆九氏に分治され、その後、木曾衆が尾張藩に組み込まれ

たり小里氏領が幕府直轄地になるなど変更があったものの、一村四給(一日市場村)・一村



細久手宿



瑞浪市における時代別主要道路

三給(大湫村ほか五ヶ村)の村が在るような極端な細分統治が行われました。

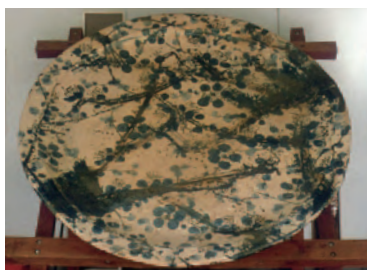
江戸幕府は、いち早く道路の整備に力を注ぎ、慶長七年(一六〇二)に中山道の整備を命じました。中山道は旧東山道をもとに道幅を広め、宿を定めましたが、瑞浪市域では細久手・大湫の山上に新道が建設され、伝馬制度の宿場として細久手宿・大湫宿が設けられました。

市街地形成と美濃焼の発展

明治になってしばらくは中山道駅制の存続が図られましたが、もともと山上に開かれた新道・新宿であったので次第に廃れ、主要な交通路は土岐川に沿ったルートに変っていきましました。明治三五年国鉄中央西線が土岐川沿いに中津川まで開通すると、人口・産業などが瑞浪盆地を中心とした平坦地に集積するようになり、現

在の市街地形成の基盤となりました。

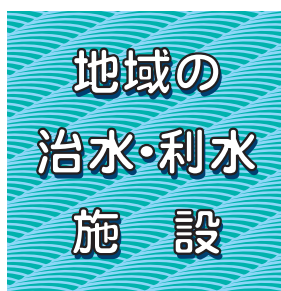
江戸時代から続く主要産業である古美濃焼(陶窓・新美濃焼(磁窓)は、伝統工芸として継承される一方、近代的な窯業に発展し和洋食器からニューセラミック製品にいたるまで、あらゆる陶磁器が生産されています。最近では「みずなみ焼き」のブランド化が進み、地元陶磁器産業の更なる発展の起爆剤として期待されています。また、単一産業から複合型産業構造への転換を図る工業団地「瑞浪クリエイション・パーク」事業も完了し、企業誘致が進んでいます。



世界一美濃焼の大皿

参考文献

- 『瑞浪市の歴史』 昭和四六年 瑞浪市
- 『岐阜県の地名』 平成元年 平凡社
- 『日本地名大辞典・岐阜県』 昭和五五年 角川書店



東濃地方の発展を支えた

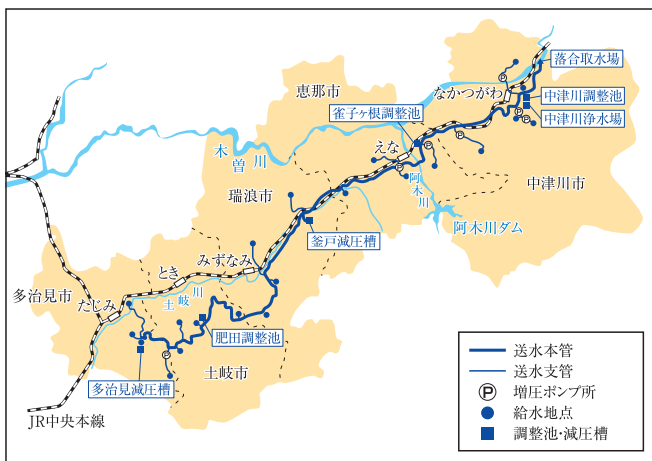
東濃用水道事業

瑞浪市・土岐市・多治見市は、都市用水の水源を土岐川に依存していましたが、土岐川の水質悪化と、発展に伴う水需要の増大に対応するため、水源を木曾川に求めて東濃用水を建設しました。

限界を迎えた土岐川利水

土岐川は岐阜県恵那市の夕立山に源を発し、瑞浪市・土岐市・多治見市の盆地を流れ、愛知県に入って庄内川と名前を変えて名古屋市港区で伊勢湾に注ぐ一級河川です。

この土岐川に沿った盆地に瑞浪市・



東濃用水道位置図

土岐市・多治見市の市街地が形成され、陶磁器産業、精密・電気工業、木工・製紙工業などが発達してきました。さらに名古屋市郊外の住宅地としても需要が大きく、大規模集合団地が開発され人口増加が著しい地域です。三市は必要な都市用水を個別に土岐川より取水していましたが、昭和



土岐川現況

三〇年代後半から土岐川の水質が著しく悪化し、白濁した「白い川」と呼ばれるほどになりました。特に、瑞浪市土岐町で土岐川に合流する小里川は、流域で窯業の原料となる粘土の製造が盛んで、特に汚濁した河川となっていました。

土岐川の水質汚濁は昭和四五～四八ごろに最悪となり、最も下流で取水する多治見市の浄水コストは

全国で一番高く、しかも浄水施設の機能を越えるような状況となって、緊急に新規水源を確保する必要に迫られていました。

一方、木曾川流域である中津川市・恵那市は、生活圏が段丘上に位置し、木曾川流路との高低差が大きく取水が困難であったため、本川に注ぐ支流を水源としていました。両市も人口の増加や産業の発展に伴う水需要に対して、水量の少ない支流からの取水では安定した用水確保が望めない状況が発生していました。

東濃用水道の建設計画

このように東濃地方の水事情は、土岐川や木曾川支流からの取水では対応できないところまで来ていましたが、他に水源を求めることは、各自治体単独では財政的な負担が大き過ぎました。そこで、東濃各市町は岐阜県に対して県営水道事業として給水事業を進めるよう強く働きかけました。

岐阜県は昭和三九年、国庫補助を得て東濃地方の利水の将来について調査検討を重ね、国鉄中央本線の複電化や中央自動車道の建設に伴う急速な発展の可能性を考慮し、長野県山口村(当時)の関西電力ダムから取水する「東濃地区都市用水供給施設計画」をとりまとめました。しかし、この計画がそのまま実行されることはなく、昭和四二年には水源を含め再検討された計画が発表されています。昭和四五年、県営上水道供給事業として東濃用水道の建設計画が発表され、翌年には厚生省(当時)の事業認可を受けました。計画は、山口ダムから取水し、中津川市・恵那市・瑞浪市・土岐市・多治見市・笠原町に供給するとし、計画給水人口は三三九、五〇〇人、一日最大給水量は一五七、九二五立方メートルとしました。なお水源手当は愛知用水の用水転用時(農業用水の都市用水への転用)に協議が成り立ち、その水源の一部が譲渡されて牧尾ダムに一・三立

方メートル／秒、平成三年に管理を開始した阿木川ダムの運用により〇・八立方メートル／秒、平成八年に管理を開始した味噌川ダムに〇・三立方メートル／秒が確保されています。

東濃用水の建設

事業計画には、木曽川からの本格取水に先立って、土岐川上流部から取水し原水を各市の浄水場に提供する暫定的な措置が盛り込まれていました。当時の土岐川の汚濁が、緊急に手当てする必要に迫られるほど深刻な状況だったことがわかります。建設工事は、昭和四十六年七月から着手され、特に汚濁の著しい小里川より上流の瑞浪市土岐町市原に取水施設を設け、昭和四十八年五月に供給を開始しました。

一方、引き続き本給水に対応する



落合取水場

木曽川からの取水施設・浄水場・送水施設の建設が進められ、取水施設については、当初計画では山口ダムからの取水が予定されていたが、山口ダムの堆砂が大きいことから、昭和四十八年に関西電力落合ダムに変更されました。取水された水は高揚程ポンプで中津川浄水場に送られ、ここで浄水となって各市町の給水施設に送水されます。昭和五十一年一〇月に全ての工事が竣工し、一月より全計画区域に給水を開始し、同時に土岐川からの取水は停止されました。

安定供給に努める東濃用水

東濃用水は、安定した都市用水を供給することで、東濃地方の発展に大きく寄与してきました。しかし、この間、自然災害など困難な問題に



中津川浄水場



窯戸減圧槽

も直面してきました。

昭和五十四年一〇月二十八日早朝、御岳山（二、〇六七m）が突然噴火し、周辺地域に火山灰が降り続けました。御岳山の南に位置する牧尾ダムは、この噴火による水質悪化が懸念され、実際に牧尾ダムへ注ぐ王滝川は、ダムの流入地点付近でセメントを溶かしたように白濁しました。東濃用水は、翌二十九日に落合取水地点や王滝川上流などの水質検査を実施し、水源地域でpHが大きく下回り、水質監視体制に万全を期しました。昭和五十九年には御岳山南東地域を震源とする長野県西部地震が発生し、大規模な崖崩れと斜面崩壊、土石流が起こりました。この地震により大量の土砂が牧尾ダムに流れ込み、落合取水地点でも高濁度化やマンガン濃度の上昇などの水質悪化が見られ、長期に渡って水質監視が強化されました。

避されました。この平成六年には、瑞浪市内で送水管が破断し復旧に三日間を要する事故も起こっています。その後、東濃用水は災害時・水源の水質事故・送水管の事故などに備えるため、平成九年に肥田調整池（土岐市）、平成一〇年に雀子ヶ根調整池（恵那市）・中津川調整池を建設するなど安定供給に努めています。

平成一六年には、危機管理の充実と東濃西部地域における水需要増加への合理的対処のため、東濃用水と同時進行で建設・運営されてきた「木曽川右岸上水道用水供給事業（可茂上水道用水）」を統合し、「岐阜東部上水道用水供給事業」となりました。



牧尾ダム

■参考文献

『木曽三川流域誌』

平成四年 建設省中部地方整備局

『東濃用水道のあゆみ』

平成一七年 岐阜県東濃用水道事務所

高須輪中の
排水管理
第一編高須輪中の
堤樋の設置

— 明治以前まで —

はつめい

岐阜県の最南端に位置する岐阜県海津市の平田町と海津町は、海津市北端を大樽川に、西側を揖斐川、東側を長良川に挟まれ、南端部は揖斐川と長良川の瀬(背) 割堤に接続した、川に囲まれた輪中地帯です。

太古の時代、この地域は伊勢の海が波打つ浅瀬で、木曾三川からの流出土砂が洲を形成した地であり、洪水被害に遭いながらも、自然堤防を利用した部分堤防や尻無し堤、さらに潮除堤(中堤とも呼称) によって生活が守られて

きました。

本稿では、潮除堤南側での輪中の形成につれて設置されてきた堤樋の建設経過の概略を述べます。

天正洪水以前の古木曾川河道と天正洪水

一五八六(天正一四) 年の天正洪水以前の古木曾川は、各務原市の三井山(標高一〇九m) の南を通り、岐阜市南境の境川筋を流れて大垣市墨俣町と羽島市小鮎町西小鮎の間で長良川を合流していました。合流後、南流した古木曾川の主流の一つが、古木曾川の派川である大樽川途中から南流して現海津市を図一のようにほぼ東西に分けていました。

図一左下隅の潮除堤は、揖斐川左岸の西小島村(海津町西小島) から南東の長良川右岸の森下村(海津町森



写真1 海津市海津町萱野に今も残る潮除堤(中堤)

下) に至る堤防です。

潮除堤より南側の地は、潮汐の影響を受ける低湿な地帯であり、潮除堤が建設された後、新田が近世初頭から徐々に南に向けて開発され、多くの輪中が形成されました。

なお、飯田汲事は古木曾川の河道変動について、河道変動は洪水前年に発生した天正地震(マグニチュード八・一前後) による地割れ、地盤沈下・液状化などの地変による、と推測しています。

潮除堤以南の輪中の形成と堤樋の設置

潮除堤は一三一九(元応元) 年に造られたとの記述もありますが、近年、一三一九年説には疑問が投げかけられています。安藤満寿男は潮除堤について、土木工事巧者の高須初代藩主・徳永寿昌が、一六〇六(慶長一一) 年からわずかに遡る年次に築いた、と推察しています。

潮除堤防には堤が、古木曾川の名



図2 1736(元文1) 年頃の本阿弥輪中の開発(『本阿弥輪中』より)

残で悪水排水幹川である大江川に一二艘、大江川の西側を南流する中江川に二艘の計一四艘伏せ込まれました。堤防建設からほぼ二五年後の一六三二(寛永八) 年に、潮除堤の堤樋は民間請負で大坂五艘、小坂五艘の新設と古川四艘の修理が行われています。

大樽川と潮除堤間の古高須輪中は一六〇〇(慶長五) 年から一六〇六(慶長一一) 年に形成され、高須輪中(南端の金廻輪中(明治一六年に伊勢の国から岐阜県に編入) は、第二代桑名藩主・本多忠政によって一六〇一年から一六二八(元和四) 年の間に形成

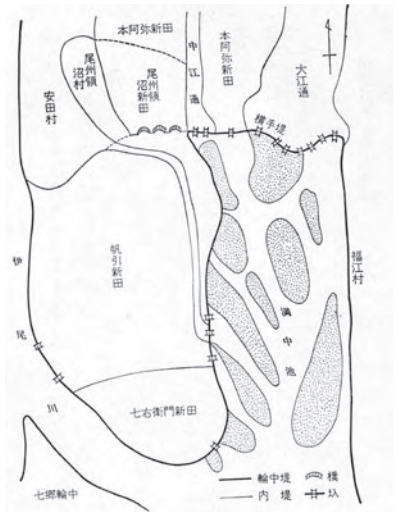


図3 1716(享保1)～1725(同10)年頃の満中池に堆積した砂の状況
 (「本阿弥輪中」より)

されたと考えられていました。本阿弥新田の開発に際し、本阿弥新田と高須輪中東南端に位置する揖斐川の

入江・満中池とを画する横手堤(長さ約四二〇m)が構築されました。

一六四九(慶安二)年の本阿弥・沼輪中の形成で、横手堤に大江通(大江川)の垵七艘、中江通(中江川)の二艘、本阿弥新田江東と深浜村の悪水を排除する一艘の計一〇艘が江下げて設置され、本阿弥新田がこれらの経費と管理費をすべて負担しました。

さらに、一六五二(承応二)年に帆引新田が揖斐川沿いの自然堤防を利用し、かつ、既存の柳湊、本阿弥・沼輪中の堤防を利用して開発され、満中池へ垵樋四艘(他村用三艘、自村用一艘)が帆引新田の負担で設置されました(図三は安田村からの垵一艘欠落)。また、一六五七(明暦三)年に七右衛門新田が開発され、垵樋一艘が設置され、満中池へ排水する垵の総数は一五艘となりました。

万寿新田の開発と垵樋の被災

揖斐川からの土砂の堆積で、本阿

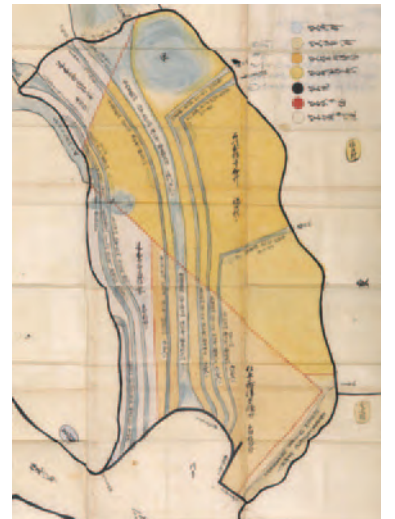


図4 満中池を開発する際の悪水路や垵の計画図
 (「高須輪中垵樋場絵図」(岐阜歴史資料館蔵))

弥新田から満中池(約一・〇km)への排水が極めて悪化し、本阿弥新田の石高は大幅に減少しました。そこで、排水改良のために、満中池は万寿新田に開発されました。

第九代笠松郡代・辻甚太郎は満中池を埋め立て、半分(〇・五二km)を耕地に、残り(〇・四七km)を水路にして満中池北端の横手堤の垵を揖斐川まで江下げる計画を立てました。工事は一〇年の歳月を経て一七三二(享保一七)年に完成しました。

絵図四は、満中池の開発に伴う、既開発の七右衛門新田、帆引新田などの悪水路の開削と垵の設置の計画図であり、同図上方に当面の調節池としての「当分池(〇・〇九km)」が見られます。

万寿新田内に八本の新江(排水路)を掘り、揖斐川左岸に接する万寿新田南端の新堤約七八〇mに一九艘の垵を伏込みました。内訳は、七右衛門新田の垵一艘を新堤西端に設置し、

万寿新田西側の帆引新田江通の一艘から大江通の七艘まで横手堤と同数の垵(計一四艘)を江下げ、新たに大江通東側の四本の新江に、福江村江通二艘、古中島村江通一艘、金廻村江通一艘の四艘を設置しました。

四〇六)年頃の絵図五は、「大江通に垵三艘の増設を希望したが、場所的余裕がなく、一艘分を中江通(深浜村江通)の垵で代用(両江通の瀬割堤を移動)し、中江通に新たに一艘新設」した絵部分)図です。三艘の増垵は一七八三(天明三)年に実現し、大江通の垵は当初の七艘から一〇艘となり、揖斐川堤防に設置された垵の総数は実に二二艘となりました。

多くの垵が揖斐川の堤防に設置されましたが、垵は揖斐川の増水による破壊、門扉内外に堆積した多量の土砂による門扉の開閉操作不良などで、収穫は期待に反して大きく減少しました。

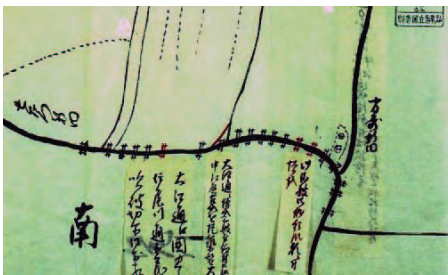


図5 大江通に中江の垵を代用
 (「万寿新田大江中江通垵樋新古仕訳絵図」(部分、岐阜歴史資料館蔵))

例えば、本阿弥輪中の石高は、万寿新田開発以前一〇年間(一七一三～一七三二)の平均石高二九四石が、工事終了後の一〇年間(一七三三～一七四二年)に平均四七石に激減しています。

万寿新田が完成した一七三二(享保一七)年から万寿騒動(百姓一揆)勃発の一八三五(天保六)年までの一〇六年間に、万寿新田の垵の破壊(吹抜け)が八回も発生しています。手抜き工事の原因との風説で輪中全体を揺るがした万寿騒動では、大江通の垵や中江通の六艘の垵(垵樋四艘、船通し水門二艘)が破壊されました。

さらなる江下げ

万寿騒動より四五年程前の一七八九(寛政元)年の洪水で、揖斐川沿いや木曾川の堤防さらに潮除堤が決壊し、万寿新田をはじめ多くの新田が水に沈みました。

この洪水による万寿新田の復旧計



図6 復旧工事案(「万寿新田垵樋之儀金廻輪中掘割江下ヶ絵図」(部分、岐阜歴史資料館蔵))

大いに貢献しています。

■参考文献

『天正大地震誌』飯田汲事

名古屋大学出版局 一九八七年

『百輪中旧記と古高須輪中の成立期』

安藤満寿男 岐阜史学七二号

『海津町史通史編下巻』高須輪中内込入札乃帳』

編集発行海津町 昭和五九年

『海津町史通史編下巻』

編集発行海津町 昭和五九年

『不曾三川流域史』第四章

編集木曾三川流域史編集委員会 平成四年

『海津町史 通史編下』

編集発行海津町 昭和五九年

『本阿弥新田』松原義嗣

二宮書店 昭和五二年

『海津町史上』

『金廻輪中絵図二・四・三』美濃郡代笠松

陣屋堤方役所文書絵図解説目録』

安藤満寿男 木曾川上流工事事務所

昭和六〇年

『海津町史 資料編二』

『岐阜県治水史 下巻』

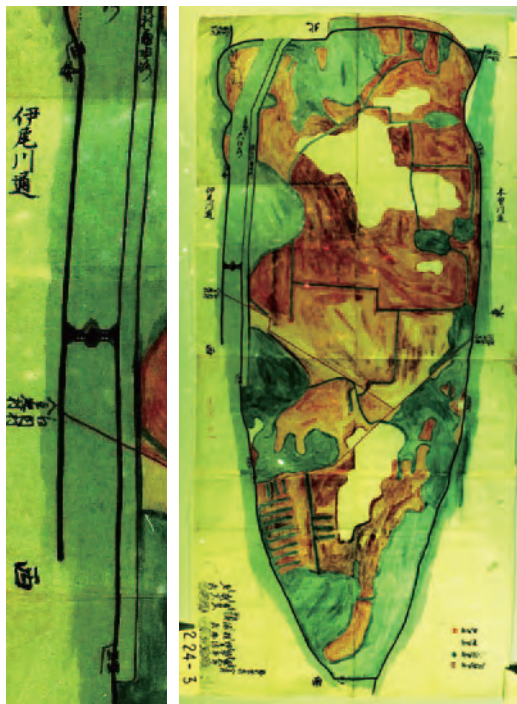


図7 1842(天保13)年～1847(弘化4)年以降の絵図／左側は大江通と福江通の江下げ部分の拡大(『金廻輪中絵図』(岐阜歴史資料館蔵))

江下げした大江通の中ほどで揖斐川に排水する垵とその堤外地に猿尾状の構造物が描かれ、さらに、下流部で両岸から張り出した構造物の真中に設置された垵(橋垵)が描かれています。また、福江通の流末にも猿尾状の構造物と二艘の垵が描かれています。

写真二は高須排水機場下流 大江川の新しくなった大江排水機場と大江排水水門であり、大江川の左岸側が福江川で、流末には福江油島排水機場が設置されています。



写真2 大江川と福江川の流末

②金廻村垵とその周囲に猿尾を造り、③水門大樋と外河堤を築き、④福江樋二艘を設置しています。

なお、①の新造された古中嶋村垵は、長さ五間(内法高五尺三寸、横二間半)の垵樋です。②の金廻村垵が大江通の途中に設置された垵樋であり、内法一間の垵を江下げで内法二間の垵樋に自普請で改築しています。③の水門大樋は、大江通の両岸から張り出した構造物(絵図七参照)の橋垵を指すと推測されます。潮除堤に埋設されていた垵樋を、江下げに際して、一二間(※)(内法高八尺、横四間)の橋垵を自普請で造った後、一八六四(元治元)年の春定式修理普請で、長さ一六間(内法高六尺横四間)に修築されています。

水門大樋は後の大江閘門(大江排水水門)であり、明治期に設置された海津町石亀と海津町札野の両排水機場は大江閘門の開扉時間との兼ね合いで操作されました。

※史料には「長式間」と印刷されているが、前後の文より二間とした。

おわりに

輪中の形成につれ、排水路の整備とともに垵樋の増設が果てしなく行われてきたことを概観しました。現在、江下げした垵樋が集中した海津町万寿新田には、中江帆引排水機場と高須排水機場が設置され、排水に

大江通の垵樋江下げについて

江下げによる新規の垵は、①古中嶋村(海津町古中島)垵樋を新設置し、

画が三案検討され、そのうちの二案
①新江を金廻輪中の中央部に掘削し垵三艘を設置して排水する案と②金廻輪中の北側の西半分に新江を作り揖斐川に排水する案は、金廻輪中の反対で実現しませんでした。

絵図六は、一七八九(寛政元)年以後数年の作成と推測される第三案であります。金廻輪中西側の揖斐川左岸堤に沿って新江を掘り、新江の流末に垵を新設して、福江村と万寿新田の悪水を揖斐川に排水する案ですが、工事は行われませんでした。

大江通の江下げ工事が明治維新間近の一八四二～一八四七(天保一三～弘化四)年に行われた時、上記の一七八九年に計画された福江村江通の江下げも行われました。

絵図七は大江通や福江通の金廻輪中の西側への江下げです。絵図には、

研究資料

一八五四年地震について

愛西教育委員会 石田泰弘



石田 泰弘 氏

1964年1月2日生まれ
中央大学文学部史学科国史学専攻卒業
1988年3月、愛知学院大学大学院文学
研究科歴史学専攻修士課程修了

現在
愛西市教育委員会社会教育課勤務

はじめに

二〇一二年三月一日東日本を襲撃した大震災は未曾有の大惨事となった。この地域も数年来東海地震が襲撃するのではないかと言われ久しい。

過去の歴史を紐解いてみると、この木曽川下流域地域においても多くの地震を経験していることがわかる。

大きな災害をもたらした地震をとり

あげてみると表1のようになる。

中でも、一五八六(天正一三)年の天正地震は、マグニチュード八弱と言われ、長島城をはじめ真清田神社等も倒壊したと言われる。この天正地震の震源地は伊勢湾とするという説もあり、我々の危機感を一層高めるのではなからうか。

一七〇七(宝永四)年の宝永地震は、東海・東南海・南海連動型地震と言わ

れ、その震域は関東から九州にまでの広範囲に及んだと言われている。

この地域においても被害が大きく、各地で民家の倒壊、液状化現象がみられたという。この年に築立された神戸新田はこの地震のために地盤沈下し再開発することとなったという。当時の尾張藩士の記録『鸚鵡籠中記』によれば、この地震の前にはフラッシュ現象や地震雲が確認されたという。

一八九一(明治二四)年の濃尾大震災は、周知のごとくこの地に壊滅的な被害をもたらした地震と言えよう。この地震によって震災予防調査会が設立されるなどわが国の歴史上においても有数の地震であったことは言うまでもない。震災の九年後に発表された「鉄道唱歌」にも「名高き金の鯨は 名古屋の城の光なり 地震のはなしまだ消えぬ 岐阜の鵜飼も見

てゆかん」とあるようにその惨状を物語る。

表1 木曽三川下流域の大震災

西暦	和暦	月	日	被害状況等
1124	保安 5	2		基目寺が地震にて破壊
1400	応永 7			東海地方大地震(被害不詳)
1425	応永32	閏6	17	尾張強震
1425	応永32	7	1	尾張強震 6・13・26日にも地震
1510	永正 7	8	7	尾張・三河に大地震 8・27日にも地震
1586	天正13	11	29	夜半頃近畿から東海道にかけて地震、家屋の全半壊400戸、死傷者多数。真清田神社楼門、回廊、社殿等全半壊
1596	文禄 5	閏7	5	尾張に強震
1604	慶長 9	12	16	夜8時頃大地震、M7.9
1648	慶安元	4	22	尾張に強震
1649	慶安 2	6	20	尾張・三河に強震
1662	寛文 2	5	1	正午すぎ、近畿・東海地方大地震、犬山城石垣破損
1666	寛文 6	4	28	尾張・知多半島に津波襲来、新田を破壊
1669	寛文 9	6	2	名古屋城の石垣崩れる M5.9
1677	延宝 5	10	9	関東南部に地震、尾張にも津波
1707	宝永 4	10	4	午後3時頃地震。震域は関東から九州にわたる。尾張では民家の倒れたところ多く、地割して泥水が噴出、田畑をおったところもあった。津島村では家屋全半壊170軒、藩領内堤防被害延長9km
1714	正徳 4	12	27	夜地震
1731	享保16	10	14	大地震、荷之上村にて噴砂
1783	天明 3	7	7	浅間山大噴火、翌8日まで戸障子ひびく、地震のごとし
1802	享和 2	10	22	午後4時頃、尾張強震、海東郡辺では地割れして噴砂あり
1819	文政 2	6	12	午後2時すぎ、伊勢・美濃・近江・尾張で強震M7.4
1854	嘉永 7	6	15	午後8時頃、東海・近畿地方に大地震、震源地伊賀盆地、M6.9 津島では市中破損、負傷者多数、前震13日12時2回、14日2時大地震、15日30回ほど地震
1854	嘉永 7	11	4	午前9時15分頃、東海・近畿・四国地方にわたる大地震、震源地遠州灘東部、M8.4、伊勢湾沿岸部津波
1854	嘉永 7	11	5	午後5時頃、東海・畿内・東山・南海・山陰・山陽、尾張藩における被害状況は、死者-4、家屋等倒壊-4081軒、田畑被害-6940石等
1891	明治24	10	28	濃尾大地震、震源地揖斐川上流域、M8.4
1899	明治32	3	7	紀伊大和地震、午前9時54分頃尾張南西部等にて地震、蟹江町では醸造中の酢・酒が溢れ出た。
1909	明治42	8	14	江濃地震、午後3時31分頃強震、尾張北西部にて軽微な被害
1923	大正12	9	1	関東大震災
1944	昭和19	12	7	東南海地震、午後1時36分頃、震度5、津島町等では旧河川または水田埋立地に建てられた家屋の被害が多かった、沈下や隆起もみられた
1945	昭和20	1	13	三河地震、名古屋震度4
1946	昭和21	12	21	南海道地震、名古屋震度4、震源地紀伊半島沖、尾張西部地方を中心に被害、津島町では負傷者-3、家屋の全壊-36、半壊-124、工場の全壊13、鍋田村では死者-1、負傷者-2、家屋の全壊-10、半壊-7

東南海地震、その翌年の三河地震は前者がプレート型、後者が直下型の地震で年こそ違え、両者は一ヶ月の間隔をおかずに勃発した。この地震は戦時下ということもあって報道されず、その被害状況は詳らかではないが、各地で液状化現象がみられ、森男一『名探偵ガラスの雨が降る夜』によれば、牛が沈み、

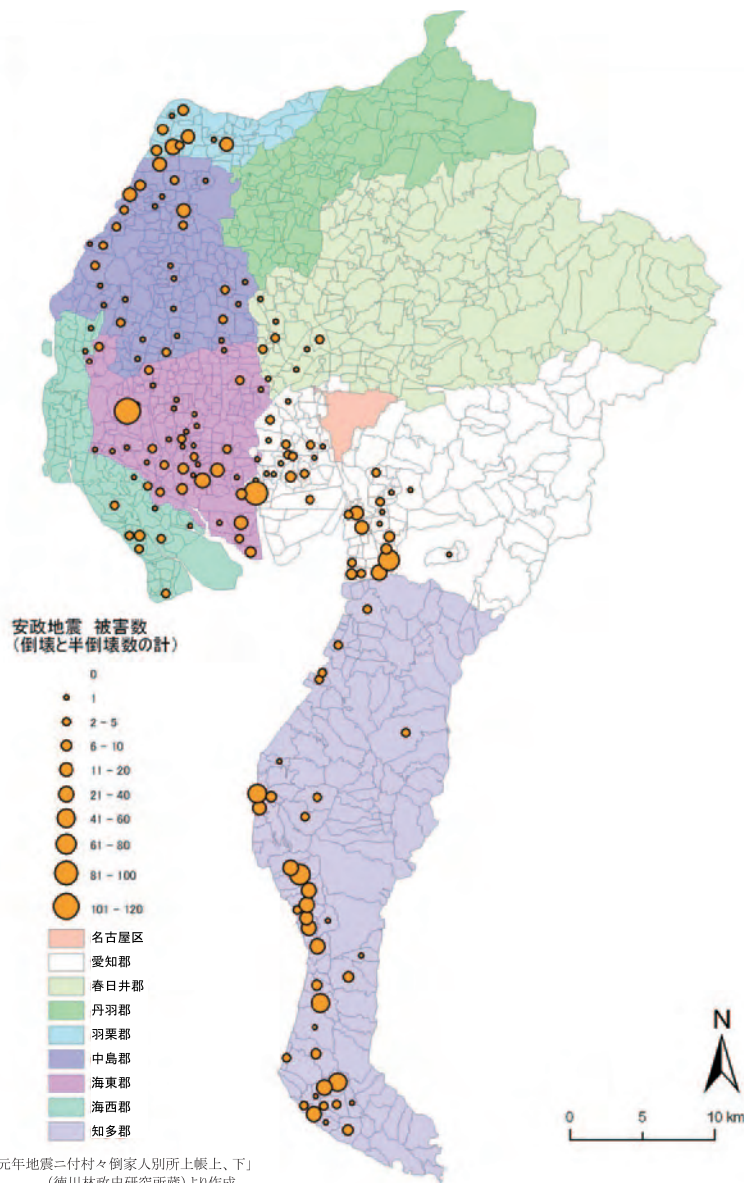
砂の柱が何本も立ったと言われている。

こうした地震のほかに、この地域を襲撃した地震が一八五四年の一連の地震がある。以下、この一八五四年にこの地を襲撃した一連の地震を取り上げ、その様相を垣間見てみることにする。

表2 1854年地震被害状況(海部地域分抜)

地域	家数	倒家	半倒家	全壊率	倒壊率
佐屋	179	1	0	0.56	0.56
六条新田	165	4	0	2.42	2.42
津島	1,650	55	48	3.33	6.24
鯉橋	37	1	0	2.70	2.70
北神守	44	1	0	2.27	2.27
南神守	116	1	0	0.86	0.86
大坪	41	1	0	2.44	2.44
下田	83	1	0	1.20	1.20
川部	94	1	0	1.06	1.06
須成	208	4	0	1.92	1.92
今	141	1	0	0.71	0.71
蟹江本町	724	22	6	3.04	3.87
蟹江新町	212	1	0	0.47	0.47
西之森	128	2	4	1.56	4.69
金柳	34	1	0	2.94	2.94
神尾	71	2	0	2.82	2.82
白浜	40	1	0	2.50	2.50
鹿伏兎	128	5	0	3.91	3.91
中一色	125	2	1	1.60	2.40
甘村井	41	1	0	2.44	2.44
北一色	60	1	0	1.67	1.67
大井	281	1	0	0.36	0.36
善太新田	50	4	0	8.00	8.00
蟹江新田	220	3	4	1.36	3.18
本部田	93	1	0	1.08	1.08
上押菰	16	2	0	12.50	12.50
亀ヶ地新田	33	1	0	3.03	3.03
鯨ヶ地新田	53	1	0	1.89	1.89
鳥ヶ地新田	95	2	0	2.11	2.11
鳥ヶ地前新田	40	3	0	7.50	7.50
服岡新田	60	3	0	5.00	5.00
飛島新田	210	39	137	18.57	83.81
朝日新田	12	4	2	33.33	50.00
政成新田	70	45	20	64.29	92.86
稲元新田	89	2	0	2.25	2.25
八穂新田	117	9	107	7.69	99.15
鎌島新田	74	7	0	9.46	9.46
芝井新田	45	2	0	4.44	4.44
平嶋新田	133	6	0	4.51	4.51
前ヶ須新田	63	1	0	1.59	1.59
綱浦	219	2	0	0.91	0.91
五之三	71	2	0	2.82	2.82
西保	147	1	0	0.68	0.68
三稲新田	17	0	5	0.00	29.41
森津新田	74	0	0	0.00	0.00
中萱津	53	1	0	1.89	1.89
森	111	1	0	0.90	0.90
千引	41	1	0	2.44	2.44
菰目寺	192	2	0	1.04	1.04
勝幅	187	2	0	1.07	1.07
草平	148	3	0	2.03	2.03
二子	125	1	0	0.80	0.80
上古川	23	1	0	4.35	4.35
東川	131	1	0	0.76	0.76
計	7,614	263	334	3.45	7.84

注) 家数は尾張殉行記から抜粋



「安政元年地震ニ付村々倒家別所上帳上、下」
(徳川林政史研究所蔵)より作成

図1 東海・南海地震の被害状況(愛知県史 別編 自然 付録 CD-ROMより)

一八五四年地震

表1をみると、一八五四年の六月一五日、二月四日、同五日の三回に亘って地震がこの地を襲撃している。

この翌一八五五年一〇月に江戸で所謂安政江戸地震が勃発しており、その影響から前年に勃発した一八五四年の一連の地震を安政伊賀地震、安政東海地震、安政南海地震と呼ばれている。しかし実際には一八五四年一月二七日に嘉永かえいから安政へと改元されていることからすれば嘉永七年時にこの地震は勃発しており、正確には安政地震とは言いがたいのだが、伊賀地震以降、東海地震、南海地震、豊予海峡、一八五五年には飛騨、宮城県沖、江戸、さらに一八五六年には三陸といったように連動するかのよう各地で地震が勃発していたことから総称し、安政をその名称に付す場合が多い。ただ

ここでは伊賀、東海、南海の三つのうち、特に東海、南海地震をとりあげることに一八五四年地震と称することにす。

表1をみてわかるように、一八五四(嘉永七)年一月四日東海地震が、その三時間後の翌五日に南海地震がこの地を襲撃している。一八五四年東海・南海地震の被害状況を図化すると図1のようになろう。この図をみると伊勢湾沿岸地域と木曾川流域に被害が大きかったことがわかる。

さらに海部地域の被害状況を表化すると表2のようになる。

表2は、倒家数、半倒家数を表化するとともに、地誌等で当時の家数をひろい、倒家数を家数で割り、全壊率、倒家数と半倒家数を足して家数で割り倒壊率を求め被害状況を記したものである。

海部地域において最も倒家が多

かったのは津島村であった。しかしその全壊率や倒壊率はさほど突出してはいないと言えよう。むしろ、新田とりわけ一九世紀にはいつて開発された八穂新田(現弥富市)、政成新田、飛島新田(現飛島村)の被害状況が大きかったことが指摘できる。この地震の後に作成された「世直り一覽」(個人蔵)という全国の地震の被災状況を記した史料によれば、桑名では「人家多くそんじ、津浪にて海辺大そんじ」とあり、四日市においては、津波記事こそ見られないが三〇四軒の家屋倒壊が見られたという。白子・津・松坂あたりでも津波の被害があったという。

尾張国海西郡荷之上村(現弥富市)の豪農服部弥兵衛家に伝来する記録から当時の様子をみると次のようになる。

一月四日の早朝より地震があり、長時間ゆれた。六月の伊賀地震よりも強い揺れであった。服部家自体にはあまり被害はなかったが、村内の一部では地盤沈下等がみられた。当日は地震が何度となくあり、佐古木(現弥富市)の庄屋が来て語るには、高さ六尺程の津波が押し寄せたという。中一色(現津島市)辺りの日光川では、堤が地震によって沈下したため津波で一騒動あったようだ。夜中もずっと揺れていたため安眠できなかった。

翌五日の夕方又地震があった。西の方で雷鳴のように鳴り響き、多度一目連権現様出現かと思われた。夜中もずっと揺れたという。

地震の惨状を窺い知ることができよう。

おわりに

以上、一八五四年地震についてみてきた。東海地震と南海地震が連動した所謂連動型の地震であったためこの地域に甚大な被害をもたらしたことが窺える。

今次の東日本大震災において、津波の問題が取り上げられ、関心が津波に集中しているような感があるが、この地域においては、やはり液状化現象が重要な問題であることが指摘できよう。津波自体の問題もそうであるが、液状化現象によって堤防等が崩壊しては全く意味がない。液状化現象への対策こそ喫緊の課題であると考える。

現代の科学が進歩を遂げたといっても、地震を予知することは難しい。ではどうすればよいのか。無論日頃からの危機意識と対策を講じることが重要であることはいまでもない。

ここに筆者は、一つ先人の知恵から学ぶことを提言したい。

体験者からの聞き書きや史料に基づいて、対策を講じることが重要であろう。愛西市教育委員会に『尾三気象俚諺』

という史料がある。一九〇一年に愛知県名古屋測候所から発行された愛知県に伝わる気象に関する俚諺を集めたものである。

俚諺というのはその地域で言い習わされていることわざで、気象に関する先人たちの経験から得られた所産に他ならない。先人の叡智がそこには盛り込まれているといっても過言ではない。

現在でも通用する俚諺も少なくない。

その俚諺集を紐解いてみると実に面白い。

地震の項をみると次のようにある。

霖雨の後ち晴穩なれば地震
天地朦朧として蒸熱きは地震
晩春冷氣数日に亘る時は地震
雉子忽ち啼けば地震の兆
冷氣催すは地震の兆
地震して雉子啼く時は震返しなし、
啼かざる時は震返しあり
地震は凡て天氣のvari目多し
地震といえは鯰なんというのがよく
言われるが、先人たちによれば、
どうも鯰より雉子の方が有効のよう
である。



世直り一覽(個人蔵)

よすけとカッパ

釜戸の村はずれの川に、深い淵があり大きな岩が突き出ていました。

昔、よすけという村人が岩に座って魚を釣っていました。その日にかぎって少しも魚がかりません。よすけは、しかたがないのでキュウリを取り出してポリポリ食べ始めました。

すると川の中から「よすけキュウリをくれ、よすけキュウリをくれ」とおかしな声がします。

「だれだ、おれをよぶのは」よすけが問いかけると、水面が泡だつてカッパが浮き上がってきました。

「キュウリをやったら何をくれる」よすけが再び問いかけると、「魚をあげます」と答えます。試しにキュウリを一本放りこむとカッパはそれを拾って沈んでいきました。

しばらくすると、つり糸がぐいぐいひっぱられ、鮒や鯉、鰻がどんどんかかり、またたき間にかごいっぱいになりました。

次の日からよすけはキュウリを持っていつてカッパにくれてやり、かわりに魚をいっぱい釣って帰るようになります。

ところが、ある日、よすけはキュウリを持ってくるのを忘れてしまいました。キュウリをとりに戻るのが面倒なよすけは、いつものように釣り糸を垂らすと、そばにあった石ころを川に投げこみました。

すると、すごい勢いで糸がひっぱられます。釣り竿をとられまいと、ひっぱたよすけはどうとうどぼんと淵に引き込まれてしまいました。

気を失って川岸に流されたよすけは、それから二度と釣りにいかなくなりました。

川の中で「このいたずらめ、うそつきめ、二度とこへ来るな」とカッパにいじめられ、おぼれてしまったということです。



木曽川文庫利用案内

ヨハニス・デ・レイケに関する文献など約4,500点の図書などを収蔵、木曽三川の歴史を知るために、多くの方々のご利用をお待ちしています。



- 《開館時間》
午前8時30分～午後4時30分
- 《休館日》
毎週月・火曜日(月・火曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始
- 《入館料》無料
- 《交通機関》
国道1号尾張大橋西詰から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

木曽川文庫へのお問い合わせは

〒496-0946 愛知県愛西市立田町福原
TEL.0567-24-6233 FAX.0567-24-5166
Mail kisogawabunk@mist.ocn.ne.jp



KISSOホームページ

<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/index.html>

Johannis de Rijke の日本語表示については、かつては「ヨハネス・デ・レーケ」と呼ばれていましたが、「KISSO」では、現在多く使われている「ヨハニス・デ・レイケ」と表記しています。

編集後記

歴史記録は、今号より2回に渡って「高須輪中の排水管理」を特集いたします。
なお、この資料は、創刊号からの全てが木曽川文庫ホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

上
「琵琶峠の石畳」
中山道大湫宿の西に位置する琵琶峠は、約700メートル余りに渡って石畳が敷き詰められており、頂上直下には八瀬一里塚が残っています。往時から中山道の名所として知られて木曽路名所図会などに描かれています。

中
「竜吟峡」
深い緑の中を流れ落ちる大小7つの滝からなり、雌雄の竜が互いを慕って呼びあったという伝説が残る神秘的な景勝地です。ハイキングコースが整備され雄大な滝と四季折々の自然を満喫しながら散策が楽しめます。

下
「笠置ダム」
瑞浪市の北東端、恵那市との市境にあたる木曽川に造られた発電用のダムで「日本の近代土木遺産 現存する重要な土木構造物」に選定されています。木曽川沿いの国道418号は通行止め箇所があり下流からは入れません。